

## 平成28年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：平成28年4月～平成29年3月

### 1. 学校概要

学校名 岡崎市立城南小学校

種 別 ☐ 保育園・幼稚園 ☒ 小学校 ☐ 小中一貫教育  
☐ 中学校 ☐ 中高一貫教育 ☐ 高等学校  
☐ 教員養成 ☐ 技術/職業教育  
☐ 特別支援学校 ☐ その他（ ）

所在地 〒444-0835

E-mail jonan@st.oklab.ed.jp

Website \_\_\_\_\_

児童生徒数 男子 169 名 女子 197 名 合計 366 名  
 児童・生徒の年齢 6 歳～12 歳

### 2. 実施活動（複数選択可）

- ☐ 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- ☒ 国際理解
- ☐ 世界遺産
- ☐ 平和・人権
- ☒ 環境
- ☐ 気候変動
- ☐ 生物多様性
- ☐ エネルギー
- ☒ 防災
- ☐ 食育
- ☐ 伝統文化
- ☐ そのほか（ ）

### 3. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

自ら考え、判断し、行動できる児童の育成  
総合的学習の時間 ～「みずから守る『水防災』」の学習を通して～

#### 1 はじめに

わたしたちは、この学習を通して、大きく三つを学びました。一つめは、自分の命は自分で守り、他の人の命も守ることができるように努めること。そのためには、身の回りの環境をいつも意識し、その場にいちばん適した行動をとることができるようにしておくことが大切だと知りました。例えば、「防災マップ作り」は、どこへ逃げればよいのか、どこが危険なのかをあらかじめ知るために、とても役に立ちました。また、占部川の工事のことを教えていただき、岡崎市や愛知県の人たちが、わたしたちのために、大がかりな工事や施設の充実に努めてくださっていること、わたしたちの命を守る支えになってくれていることに気づきました。

二つめは、わたしたち城南学区が矢作川、占部川といった川に囲まれ、大雨のときに町が水でつかってしまったり、大地震のときに液状化現象で、建物が倒れやすくなったりして、危険であるということ。二つの川のおかげで、城南学区は豊かになったのだけれど、危険といつも隣り合わせであるということをおぼえてはいけないことを学びました。

最後は、自然と共に生活し、環境を壊さないように心がけるということ。大地震や大雨は、とても怖い自然災害です。でも、怖がっているだけでは何も解決しません。防災学習といっしょに勉強した「地球に優しい生活」。例えば、ごみを減らす、水を大切に使うなどのエコ生活。こうしたことを心がければ、自然災害を小さなものにできると学びました。これからも、自分で判断し、行動できる人になることができるよう、勉強していきたいと思います。

(平成28年8月29日愛知県防災フォーラムの児童Bの発表原稿)

5年生になった児童Bは、蛍光オレンジ色のスタッフジャンパーに身を包み、汗を流しながら、中央総合公園武道場のステージで、友達とともに堂々とスピーチした。その顔には、すがすがしい輝きが満ち溢れていた。

学習指導要領では、安全指導として、「防犯を含めた身の回りの安全、交通安全、防災など、自分や他の生命を尊重し、危険を予測し、事前に備えるなど日常生活を安全に保つために必要な事柄を理解し、進んできまりを守り、危険を回避し、安全に、行動できる能力や態度を育成する」と記されている。

先の東日本大震災では、地震や津波の恐ろしさを知り、今後、東海地方にも訪ずれるであろう大地震に備えることは、喫緊の課題となっている。そこで、想定外の災害や大地震に備え、いかなるときでも自らの命を守ることができるように、「ふるさと城南」の防災に目を向けていく子供を育成することが大切と考え、本単元を計画した。



#### 2 研究の仮説と手立ての設定

##### (1) 研究の主題と仮説

目の前の児童に目を向けると、さまざまな家庭環境、外国籍家庭などものの考え方や価値観の異なることが多い。しかし、どの児童も人が良く、他者を温かく受け入れようとする資質を感じる。真面目・精いっぱい心根で生きたいと思いながらも、自分を見失いそうになる弱い心が自分を高めるようする以前に他者を否定してしまう。これが本校児童の弱さでもある。児童の主体性を大切に、教育を展開したい。そのために自己有用感を高める実践に取り組もうと、本校は考えている。そこで、自ら考え、判断する力をさらに高め、進んで行動することができる児童を育てるよう研究を推進した。

#### 【研究主題】

自ら考え、判断し、行動することができる児童の育成

#### 【研究の仮説】

題材や教材を吟味し、単元の構想を工夫し、実践を進めることで、児童は学習活動に浸り込みながら、意欲的に人と関わりをもち、自ら考え、判断し、行動する意欲を高め、よりよい自己形成を具現するであろう。

#### （２）仮説をいかに検証するか

児童の主体性を育み、学びを深化するよう、以下の手立てを設定した。

##### 手立て① 学校行事「城南シティカーニバル」を軸とした教科、領域をつないだ題材・単元構想の工夫

本校には、今年で十二回を数える学校行事「城南シティカーニバル」という、一年間の生活科、総合的な学習の時間のまとめとなる行事がある。ここでは、プレゼンテーションや遊びを取り入れたお店の展開など、児童にダイナミックな活動を保障している。今回は、４年生の社会科、総合的な学習の時間を防災学習に展開し、題材、単元を児童の学びの意識をつないで構想する。

##### 手立て② 題材、教具の工夫

以下は、平成２０年８月の東海豪雨の際の岡崎の被害の様子である。

愛知県岡崎市では、８月２９日午前１時から２時までの１時間、降水量が１４６．５mmを記録した。この記録は、気象庁観測史上７位、８月の降水量としては１位で（統計期間１０年以上の地点に限る）、平年の８月１ヶ月分の降水量を上回った。また、岡崎市中心総合公園に同市が設置した雨量計では、上記の同時間あたり１５２．５mmを記録した。

この結果、岡崎市内の広範囲で洪水が発生した。２９日２時１０分、岡崎市は全市域（約１４万世帯３７万６千人）に避難勧告を出し、県を通じて自衛隊の派遣を要請した。避難勧告は各地域の総代５０人へ電話連絡により担当地域の全市民への通達を依頼し、その他、ケーブルテレビのミクスネットワークやラジオのエフエム岡崎を通じた発信を行った。しかし、エフエム岡崎の知名度が低く、普段から聴いているリスナーが限られていることもあったり、発生時刻が深夜だったために、総代から全市民への連絡は届くはずもなく、降水のピークだった午前１時台を過ぎて冠水していた道路を避難所まで向かう危険性などから、実際に避難所へ避難した人はたったの５１人だった（市民の中には、翌日になって初めて避難勧告が出ていたことを知ったという人も多かった）。市内では、伊賀川、更紗川、小呂川、前田川、鹿乗川、占部川、砂川、乙川の９つの河川が氾濫し、竜泉寺川にかかる三河橋が崩落した。この雨による住宅被害は全壊４棟、半壊１棟、また床上浸水８９０棟、床下浸水１６１０棟で、全体で２５００棟に達し、災害ごみも１０３５ｔに達した。また、被害者としては、２９日午前５時半ごろ警察や消防が岡崎市伊賀町で浸水した民家から住民だった７６歳の女性の遺体を発見し、３１日８時ごろ約３０km離れた愛知県南知多町の日間賀島にて釣り人が岡崎市城北町に住んでいた８０歳の女性の遺体を発見した。

平成20年は、現在の小学校4年生の児童にとっては生まれた頃の話である。児童に聞くと、家族から話は聞くが実感はないという。そのとおりである。

東日本大震災の語り部事業に本校が参加した折、講師の菊池訓子さんが「忘れないこと。そして語り継ぐことが一番大切なことです。」と全校児童に講話された。さまざまな題材、教材を教師が吟味し、児童に提供することこそ、最大の教師支援である。

### 抽出児・児童Aの設定

児童Aは、何事にも意欲的に取り組む児童である。探究心旺盛で、自宅で飼育していた青虫の様子を、教師や保護者に何も指示されなくても、自分で観察日記をつけて、日に日に成長する様子を楽しんでいたと聞いた。そんな児童Aが本単元のなかでいかに自己有用感を高めていくかを対話や学習記録からとらえをつなぎ、手立ての有効性を検証したい。

## 3 実 践

### (1) 先輩の取り組みに学ぶ（平成27年度の実践）

#### ① 城南シティカーニバルで、先輩の「水防災」のお店で疑似体験をする

昨年度、4年生は占部川について学習した。フィールドワーク、防災マップの作成、学区の防災に関わる施設の見学、学校に設置された防災倉庫内の見学。これらの活動を経て、11月末に行われた城南シティカーニバルでは、全校児童や来校する保護者、学区民に防災の大切さを伝えようと、展示コーナーと体験コーナーを設置した。

これは、昨年だけのことではない。平成22年から継続してきた、4年生の取り組みである。

ユネスコスクールに加盟している関係で、毎年、いろいろな学校の取り組みに触れる機会がある。それぞれの地域性、学校の風土にあわせて、発達段階を踏まえた全校的な取り組みをしている。それらを見せていただくたびに、6年間完結型の取り組みの良さを実感する。ただ、多文化共生を軸にして学校活動をすすめている本校は、一つの活動内容を極めるのではなく、さまざまなカテゴリーの活動の体験をととして児童の学びを育みたいと考えてきた。そこで、学年ごとに4月当初、目の前の児童を育むことを前提に、毎年カリキュラムを見直している。次のページにあるようなカリキュラムを基盤に、おおよそ取り組んでいる。

全校児童は、働く店で手に入れた通貨ジョナを手に、4年生の防災の店を訪れた。防災に興味がある児童もいたが、児童の一番のお目当ては、最後に味わうことができる防災食のアルファ米と乾パンの試食であった。試食するためには、最後までお店の体験コーナーに参加しなければいけないし、説明を聞かなければいけない。少し主旨に反するところもあるが、お店の運営ではあるが、



体験コーナーの災害用テント（昨年度）



防災マップと防災グッズの展示（昨年度）



防災倉庫の用品の紹介（昨年度）



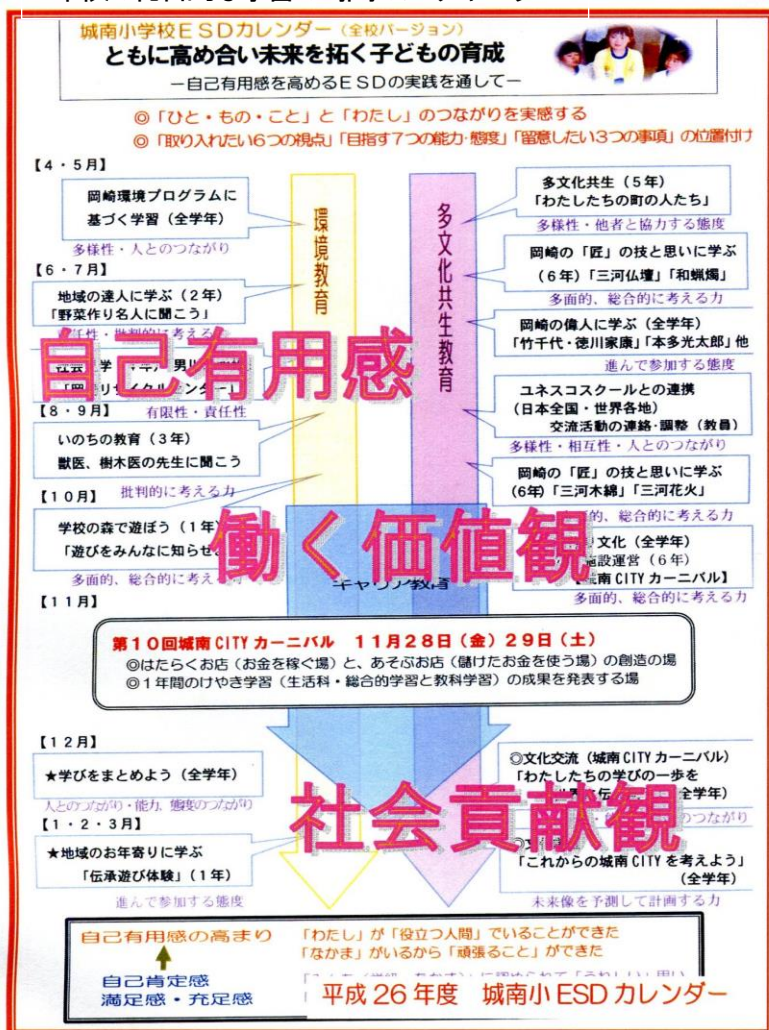
これも、集客のために4年生が考えた知恵である。

当時、3年生だった児童Aは、次のような感想を残した。

わたしは城南町に住んでいるんだけど、江口町がそんなにひどいひ害にあったなんて、びっくりした。わたしの家にも防災グッズがあって、お母さんが食べ物とか水を入れているんだけど、家族5人が食べれるか、帰ったらたしかめてみたいと思いました。アルファ米が思ったよりおいしかったから、家のグッズにも入れるようにお母さんに言います。

(3年生の児童Aの昨年のカーニバルの感想)

## 本校の総合的な学習の時間のカリキュラム



## 1年生「なかよし」 環境

「ふるさと森」「学区の公園」  
森の木々や木の実にふれ  
自然の素晴らしさを体験する中で、  
遊びづくりを通して、  
友だちとかかわり合いながら、  
学校や地域のよさを  
実感を重ねていく。

## 2年生「はっけん」 環境

おいしい野菜作りを追求する。  
ときには苗を枯らしてしまうような  
厳しい自然と向き合い、  
丈夫な野菜を育てる自然に感謝する。  
地域の野菜作り名人と出会い、  
コツをつかみながら  
粘り強く栽培に取り組む。

## 3年生「かかわり」 命

3年生から始まった飼育当番。  
糞尿の臭いにめげそうな春。  
うさぎの愛らしい仕草に  
大切に育てたいと、願いは深まる。  
夏の暑さ、冬の寒さ。  
うさぎが幸せに暮らす。  
自分たちにできることを  
話し合い、動き出す。

## 4年生「共に学び愛」 防災 環境

みずから守る防災活動。  
学区の特性と、それに対する岡崎市の取り組み。  
市河川課の出前講座の受講、クリーンセンター、  
浄水場、ホテル学校への社会見学。  
さまざまな環境学習を通して、  
尊い命を守るために子ども自らが動き始める。

## 5年生「共生」 共存 多文化

ユネスコスクールとしての活動。  
昨年の6年生の取り組みに共感するとともに、  
外国籍家庭の多い本校の特徴を振り返り、  
日本と外国のさまざまな文化の相違点を学ぶ。  
世界の国々のよさの理解、日本のよさの再認識。  
日本人としての誇りを自覚していく。

## 6年生「匠・語り継ぐ」 地球

地球一個分で生活するためには、  
今の生活からいかに節約しなければならないか。  
そんな折、文化を継承する伝統工芸士と出会う。  
匠に学ぶ活動を通して、  
なんでも便利さを追求する現代科学と  
地球と共存する優しさは融合すべきと知る。

## 5、6組「みんななかよし」 食

自分で考え、自分で生活する力を身に付ける。  
自律を目指して、毎日熱心に学ぶ。  
学級農園で土を耕し、苗を植え、虫を捕る。  
おいしい野菜を育てたら、自然に感謝し、  
おいしく食べる技を磨く。  
自分の役割を理解しながら協力する。

【練る段階】カーニバルを通過点とするけやき学習を構想する



児童Aの学年は毎日飼育に取り組んでいるうさぎの命を守るという主題で、調べ学習の発表やうさぎを抱く体験コーナーを出店していた。自宅で防災グッズを備えており、それを3年生の児童が理解していることから、恵まれた家庭環境に児童Aがあることがわかる。そんな児童Aが帰宅したら早速確かめてみようという具体的な行動に移している。先輩の学びに触れ、学びを共有し、知恵として自分に定着させる。城南シティカーニバルによる学びの広がりが確実に定着していることがわかる。

## ② 愛知県ユネスコスクール交流会の取り組みに学ぶ

昨年秋、愛知県のユネスコスクールに所属する学校が、各校の取り組みについて発表をする交流会在愛・地球博『モリコロパーク』で開催され、本校も参加する機会を得た。そこでは、全校を代表して6年生が自分たちの取り組み「郷土・岡崎」の学習の成果と城南シティカーニバルについて発表した。

環境保全について全校で取り組む小学校、外国の学校と交流を深めている中学校、校舎の屋上で蜜蜂を飼育してその蜂蜜を使った料理を地域に提供しようという行動している高等学校など、本校とは深まりの大きな実践を聞き、参加した児童は負けじと自分たちの活動を紹介した。



ユネスコ交流会で発表する6年生

わたしたちの学校には、とても多くの外国の友達があります。学校には「ポルトガル語」「スペイン語」「中国語」「英語」そして「日本語」で説明の言葉が書かれた看板がたくさんあります。日本語教室で勉強する友達もたくさんいます。城南小学校は、「国際理解教育」を頑張っています。

また、学校の近くに大雨が降るとすぐにあふれて、町を水浸しにしてしまう占部川や一級河川の矢作川が流れています。そのため、大きな地震が来ると、液状化現象が起こり、たくさんの建物が倒れてしまうと言われています。先月17日、宮城県から「東日本大震災の語り部さん」として、菊地訓子さんをお招きしました。そこで、津波の恐ろしさや震災で苦しかったこと、そして、頑張っていること、一生懸命生きる素晴らしさを教えていただきました。わたしたちは「防災教育」も頑張っています。

「外国の人と仲良くする勉強」「災害から命を守る勉強」「学区の町調べの勉強」「学校の森や自然の勉強」「高齢者福祉の勉強」毎日、各学級でテーマを決めて勉強しています。そこで、今年、平成27年はどんなカーニバルにしようか、6年生のカーニバル実行委員会が、夏から考え、計画を進めてきました。

今年は、わたしたちの住む岡崎市が輩出した徳川家康公の顕彰400年の記念の年で、市をあげて盛り上がっています。そこで、今一度、わたしたちの町、岡崎のよさを見つけようと考えました。

(平成27年10月10日の交流会の発表原稿より)

## ③ 学ぶとは伝えることであることを自覚する

せっかくの6年生の取り組みなので、全校児童にも見聞かせたいと考え、後日、体育館の全校児童の前で同じプレゼンテーションを6年生にさせた。この時は、まだカーニバル前であったということで、6年生の「家康学習」の中身までは言及できなかった。しかし、カーニバルとはこんなに楽しくて、思いがいっぱい詰まったものなのだという雰囲気は全校児童に伝わった。

わたしは、いきものが好きなので、毎日のうさぎ当番が楽しみです。だから、カーニバルでうさぎのことを発表することを、今から楽しみにしています。お姉さんたちのはっぴょうを聞いていると、なんだかワクワクしてきます。なぜかという、自分の知っていることをみんなに教えてあげることができるからです。わたしは、うさぎのお世話のしかたを教えるやくです。がんばります。

(3年生の児童Aの感想)

学ぶことが楽しいと実感することができる。それは、自分の知っていること、わかったことを他者に伝えようと、さらに学びをより強いものとするすることができる、その連続が生むものである。城南シティカーニバルとは、その連続を一つの伝統として継承する、本校にはなくてはならない行事である。

## (2) 占部川について学びを深める

### ① 父母や祖父母から占部川について聞く

児童Aたちが4年生に進級した。部活動や委員会が始まり、低学年と言われてきた児童がお兄さん、お姉さんになる。3年生で始まった社会科や理科の学習も漠然とした体験から内容を焦点化した学習へと、しだいに高まっていた。

2学期。児童は、1学期の社会科学習した「家事からくらしを守る」と「水とごみのしよ理」の二つの学習から、より良い環境づくりのためには子供である自分たちにもできることがあるはずだと意識をし始めていた。そこで、担任はちょうど児童が生まれた頃にあった東海豪雨について話を切り出した。3ページにあるような岡崎に実際にあった大雨による被害、伊賀川で起きた大変な出来事、そして自分たちの住んでいる城南学区でも大人の胸の高さまで水に浸かるほど大きな被害があったことなど、いくつかの写真資料を見せながら担任が語った。

児童Aは、帰宅すると保護者に聞き取り調査をした。

わたしが1年生のときに占部川の工事が始まりました。窓から工事の様子を見ることができました。一年以上、ずっと工事が続いていました。後から、その工事が、占部川にたくさんの水が流れてもあふれないようにするための「ごがん工事」だと教えてもらいました。今はとてもきれいな占部川だけど、いろんなことがあったことがわかりました。

(児童Aの後日の感想・対話より)

### ② 岡崎市河川課、防災危機管理課の方から学ぶ

4年生学年部の担任は、6月に入ると岡崎市河川課と防災危機管理課と連絡を取り合い、4年生児童の学習に資料を提供いただくとともに、9月に屋外の活動を実施する際の補助を依頼した。主には、平成20年に起きた東海大豪雨の詳細なデータ等による説明と、フィールドワーク、防災マップ作りの補助である。

まず、河川課職員3名が来校し、占部川が現在のようにきれいに整備されるまでのいきさつや、どのように整備が進められてきたかについて、資料を提示しながら説明をしていただいた。児童は占部川がここまできれいになるには、たくさんの人とお金がかかっていること、岡崎市と愛知県が半分ずつ折半して整備を進めてくれたことなど、いろいろな情報を聞くことができた。

続いて日を変え、岡崎市防災危機管理課職員3名が来校し、パワーポイントを利用して、東海豪雨のときの被害について具体的に教えてくれた。また、その対策として占部川を工事するだけでなく、雨水貯留池、遊水地、校庭貯留、ため池の整備など、さまざまな仕組みを同時に進めることで大雨から町を守っていることを児童に伝えた。





城南小学校の下に水をためるためのせつびがあるなんて、思ってもみなかった。それに、わたしたちの命を守るために、たくさんの人が助けてくれていることを知って、うれしかった。町には、いざにげないといけない時にあぶないところがあると聞いたので、調べてみたい。

(児童Aの事後の感想)



河川課、防災危機管理課の方から学ぶ

### ③ フィールドワークで自ら理解を深める

防災危機管理課の方に「占部川は地面の下を流れています。」という話を聞かされ、そのことを知っている地域の児童からは当然のように知っているという声があがるなか、確かめてみたいという声が強くあがった。

そこで午後、4年生の児童は防災危機管理課の方の補助を受けながら、二つのチームに分かれて学区の安全確認の探検に出かけた。目的は大きく二つ。一つは、本当に占部川が町の地下を流れいるのかということ。もう一つは、災害時に非難する際、危険な箇所がどこにあるかということを確認すること。この二つであった。

まず、児童は道に設置されたマンホールの数の多さに驚いた。そして、道の両脇に設置された溝が思いの他深いということを知った。なかには、実際に溝のなかに入って、自分の胸の高さほどの深さがあることに驚いた。また、自動販売機が思っていたよりも不安定に設置されていたり、道脇の雑草が大きくなって側溝を見えなくしていたりと、避難する際に危険になる可能性が高い箇所をいくつか確認することができた。



地下に流れる川の音を聞く児童

次に、占部川が町の地下を流れていることに着目した。その視点でフィールドワークを続けていくと、川の水位を調節するための施設が、学区に複数設置されていることを知った。また、防災危機管理課の方の「この下を川が流れています。耳を澄まして音を聞いてみてください」の説明を聞くや否や、多くの児童が道路に横ばいになり、路面に耳を当てて、川の流れる音に聞き入った。自分の住んでいる町の下に川が流れていると知っていた児童も、川の流れる音を耳にすると、感慨深げな表情をした。

水が流れる音が聞こえたときは、本当にびっくりした。大きなふたが道にあって、その下を占部川が流れているとお母さんに聞いたけど、音が聞こえて、ドキドキした。道にマンホールがこんなにたくさんあったなんて、気づかなかった。(児童Aの事後の感想)

児童は学校に戻ると、探検バックの紙に書き込んだ内容を班ごとにまとめた。どこに危険な場所があるか。いざというとき災害時には、どの道逃げれば安全か。また、これからその危険な場所をどうしたらよいか。安全マップを作りながら、児童は、これまでの体験をもとに話し合いを進めた。そして、8つの班がそれぞれのマップを提示しながら、思ったこと、感じたことを進んで発表し、意見を交換し合うことができた。



安全マップにまとめて発表する



わたしは、城南公園の横や子どもの家があるとなりにあるみぞが、深くてあぶないと思いました。なぜかという、大雨がふったときに水がたまって、ひょっとしたらにげる人がみぞに落ちてしまうのではないかと思うからです。たぶんだけど、深いのはそれだけ水がその場所に集まるからだから意味があるとは思いますが、でもそれならほかの所みたいにちゃんとふたをすれば、安全だと思う。こういうことを、もっといろんな人に伝えないと、自分の命も守れないのではないかと思います。

(安全マップを作成した後の児童Aの感想)

児童Aのような気づきをした児童は、たくさんはいなかった。逆に、児童Aは自動販売機の不安定な設置や家が高い場所、低い場所、まちまちに建っていることに気づくことができなかった。友達の発表を聞き、児童Aもはっとするようなことがいくつかあった。こうした気づきの共有こそが、わたしたちが大切にしたい関わり合いの重要なところである。

### (3) 自分の命、他者の命をすすんで守る「使者」である自覚をもつ

#### ① 城南シティカーニバルに出店する

いよいよ児童の学びに基づいて、思いを伝達する場として城南シティカーニバルの運営を児童は考え始めた。これまで、1年生では、学校の森の遊び場を紹介するお店。2年生では学区にあるお店を探検し、そこで知ったお店の工夫を、模擬店を通して紹介した。3年生は前述のとおり、うさぎの飼育体験から全校にうさぎの命を守る大切さを伝えるお店。それぞれの学級独自のお店を出すことで、さまざまな経験を積んできた。こうした3年間の経験を踏まえて、4年生の二学級が「防災のお店」と「ごみ処理施設と浄水場施設の紹介」の二つのお店を出店することとなった。

児童Aの学級は、防災のお店であった。まず、自分たちがたくさんの人に人にいざというときに命を守るためには、正しい判断と行動が必要であることを伝えたいと考えた。そこで、消防署の見学で知った消火の体験や、消防車などの設備の紹介をしようと動き始めた。また他方では、学校にある防災倉庫のなかを紹介して、いざというときは子供である自分たちも正しい行動ができるようにしようと動き始めた。そして、たくさんの人に来店してもらうよう、先輩たちも出してきた防災食の試食と、リーフレットを作って、それをお土産にあげようと準備を始めた。



わたしは、防災食の仕事をたんとうしました。担任の先生が岡崎市役所の人からアルファ米をたくさんわけていただきました。アルファ米の袋にお湯を入れて、30分くらいするとできます。災害があったときは、水を入れればできるそうなので、とても便利です。むかしは、あまりおいしくなかったと先生が言ってたけど、食べてみてびっくり。すごくおいしかったです。これなら、もしも食べるものがなくても、だいじょうぶかなと思いました。たくさん、お客さんが来て、喜んでくれるといいな。(児童Aのカーニバル前の感想)

カーニバル当日は、消防署と学区の消防団の方が協力してくださり、本物の消防車にも来校いただいて試乗することができ、児童は大喜びであった。また、運動場に防災テントをお借りして設営した体験コーナーでは、水消火器を用いた的あてゲーム、アルファ米の試食コーナー、防災クイズといったブースを設け、たくさんの児童や保護者、学区民に自分たちが学んできたことを伝えることができた。

わたしたちの学級は、いつもけんかばかりしているし、みんな勝手なことばかりしていてまとまりがない。でも、防災の勉強をして、カーニバルでお店づくりをしていると、みんなが楽しいアイデアを出してくれて、いっしょにしている楽しい。

担任の先生も「こうしてみたら」とたくさんアドバイスをしてくれたり、消防しょに電話して消防車をよんでくれたりしました。消防車についているはしごに登ってながめた景色はすてきでした。わたしは試食コーナーを担当したけれど、みんなが「おいしいよ」と喜んでくれたし、たくさん遊びに来てくれたので、やってよかったと思いました。友達がカーニバルのエンディングで「わたしはついこの前転校してきたばかりだけど、みんなとカーニバルができて、とてもうれしかったです」と全校の前で話してくれました。わたしもうれしかったです。防災は、自分たちが知っていることも大切だけれど、たくさんの人に自分たちが学んだことを知らせることがもっと大切なのだと思います。今年のカーニバルも大成功でした。来年は何ができるか、今から楽しみです。(カーニバル後の児童Aの感想)



学級が考え、設置した防災のお店の様子



[illegible]

#### 4 手立ての有効性を探る

- 11



- ⑤カーニバルでお店づくりをしていると、みんなが楽しいアイデアを出してくれて、いっしょに楽しくて楽しい。防災は、自分たちが知っていることも大切だけど、たくさんの人に自分たちが学んだことを知らせることがもっと大切なのだと思います。
- ⑥私は、これからもみんなで力をあわせて、ながなわ大会などに、このことをいかせていけたらいいとおもいます。

#### 手立て①の検証「題材・単元構想の工夫」 手立て②の検証「題材、教具の工夫」

①「いろんなことがあったことがわかりました」②「あると聞いたので」③「たくさんあったなんて」。これらのことばからは、活動は楽しいし目標に向かって精いっぱい気持ちで取り組んでいるものの水防災という追求対象を自分事にしていない児童Aの意識がわかる。それが防災学習から学びを伝えるカーニバルの創造へと活動場面が広がるに従って④「もっといろんな人に伝えないと」⑤「たくさんの人に知らせることがもっと大切なのだ」のような他者に向けた意識が深まっている。教科・領域との連携の是非にはならないが、題材をつなぎ、単元構想を工夫したことで児童の追求の姿勢が強まり、意識が変容した。また、⑤「いっしょに楽しくて楽しい」⑥「このことをいかせていけたらいい」からは、この単元を越えたところの他者と主体的に関わっていきたいという児童Aの心情の高まりを感じることができる。実際に、児童Aはこれまでの4年間の小学校生活で初めて、学級のリーダーに立候補し、仲間の信頼を得て学級代表となって活躍している。

## 5 おわりに

防災意識を高めるには、いかに災害を自分事として捉えるかが重要である。しかし、被災経験のない子どもたちにとって、災害の恐ろしさや実感をもつことは難しい。これは、本校の児童のみに限らず、今後の防災教育の課題である。今回の防災学習を通して、災害が起きたときに臨機応変に対応していくためには、地域の方との協力が大切であることを学んだ。今後も、地域の防災訓練に積極的に参加したり、近隣の方とのあいさつをしたりするなど、子どもたちのコミュニケーション能力を高める場を大切にしたい。また、一人一人の防災意識の高まりこそが公民的資質を形成する上で重要であることに気づかせたい。

また、防災教育を通して、自動が主体的に社会に働きかけ、自ら考え、判断し、行動できる資質を高めようと実践を重ねた。そこには、担任教師の絶え間ない探求と、学年部等の教師集団の事細やかな連絡と相談、そして児童を温かく見守り育むすべての学校職員の愛が欠かせないことを改めて自覚することができた。今後も教職員が一丸となって児童の成長を支えていきたい。

### (2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- ☒ 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）  
☐ 時間外活動の時間を使用  
☐ ユネスコクラブの活動として実施  
☐ その他（ ）

===== ※以下は公表しません =====

#### ●担当者名

職 名	教 頭
氏 名	高 鋤 利 行 (男)
電 話	(0564) 52-2913

E-mail      [jonan@st.oklab.ed.jp](mailto:jonan@st.oklab.ed.jp)

※学校の共用メールアドレスをご記入ください。

(共用メールアドレスがない場合は、個人メールアドレスでも可。)

●活動の内容を補完する以下の資料があれば添付願います。(※別途郵送でも可)

- ☐ 紙媒体の参考資料（新聞、出版物など） ☐ CD-ROM ☐ 写真  
☐ その他（ ）

## 留意事項

※必ず本様式に記載してください。

※学校名は正式名称を記載してください。

※当報告書はユネスコスクールホームページに掲載するため、活動内容は必ず、添付資料ではなく本報告書の「3. 活動内容」欄にご記入ください。

※ユネスコ本部においても、ユネスコスクールの活動内容の充実が重要視されており、報告書の内容が一定の基準に満たないもの、報告書が2年連続未提出の場合には、ユネスコスクールの加盟取り消しを勧告させていただくことがありますので、あらかじめ御了承ください。